

ロボットや電気刺激を融合

患者の

みなさんへ

十勝の医師のメッセージ

「回復期リハビリ」は、脳卒中や骨折などの治療後の患者が、自宅などの住み慣れた場所に戻り、また、自立した生活を維持するために不可欠な医療だ。低下した能力回復に向け、さまざまな専門職が、集中的にリハビリを実施する。介護保険と同じ2000年に制度化された回復期リハビリテーション病棟は、高齢化社会の進展を受け、ますます、その重要性が増している。

セラピストも充実

道東で最大規模の回復期リハビリ病棟を持つ、社会医療法人北斗の

十勝リハビリテーションセンター
白坂智英 院長

十勝リハビリテーションセンターの脳神経疾患、整形外科疾患、廃用症候群（活動性の低下や過度の立）。帯広市を中心に、十勝全域 安静で生じる身体の障害 などの

正確な回復予測へAIも

患者に対する回復期リハビリ、訪問リハビリ、生活期リハビリを提

したりリハビリの実践で、患者さんが失った機能を最大限に回復することを目指している」と話す。

1264平方メートルの大規模リハビリ室を備え、スタッフは146人

「どの障害に対しても最先端の治療を行うことの考えに基づき、ロボット一つをみても、上肢、手指、

(7月20日現在)と、道内でも有数のセラピストを備える。22年4

下肢専門の機器がそろそろ。電気刺激装置も今後は、嚙下(えんげ)障害の回復に対応した機器を導入する。セラピストの経験と、症状に合わせた最先端のロボットや電気刺激装置の融合で、最大限の効果を得られる」と話す。

月から院長を務める白坂智英医師(53)は、「患者さんが、本来の

白坂院長は「患者さんやご家族が一番気にするのは、自分がどれくらい回復できるかの『予測』と強調。正確な予測に合わせた訓練を的確に進めるため、今夏から人工知能(AI)を用いた予測に取り組んでいる。

生活の場に戻るためのお手伝いをするべく、スタッフ一同がチーム一丸となり、シームレス(つなぎ目のない)なりハビリを提供している」と話す。

「患者さんは住み慣れた自宅、もしくは住み慣れた地域に戻りたいと思っています。そのために機能を改善させるためのリハビリがある」と説く。「十勝で最先端リハビリを受けていただき、住み慣れた自宅や地域に帰っていただくのが、私たちの一つの使命」

11月には「歩行用」

同センターでは19年から、ロボットや電気刺激装置、磁気刺激装置など、高機能な機器によるリハビリを積極的に展開。最新鋭の歩行ロボットも11月に導入の予定だ。白坂院長は「最先端のリハビリ機器を用いて、質量ともに充実

最先端の機器を用いたシームレスなりハビリの提供で、機能を改善していただくのが私たちの使命」と話す白坂院長

(松岡秀真)

